

二年	国語	Gアップシート	読む1
----	----	---------	-----

組	番・氏名
---	------

★物語と自分の経験を重ね合わせ、感想をまとめてみよう

◇蔵本さんの学級では、『物語を読み、自分の経験と重ねながら

感想をまとめよう』というテーマで本を読んで感想を書き、交

流することになりました。そこで蔵本さんは芥川龍之介の

「杜子春」を読み、感想を書くことにしました。



【ここまでのあらすじ】

貧乏な青年杜子春は、その境遇をあわれに思った仙人の鉄冠子から二度も財産を授けられるが、財産を得ると集まってきた人々が、財産を失うと去っていく様子から人間に嫌気がさし、仙人に弟子にしてもらえるように頼む。すると、仙人は杜子春を峨眉山に連れて行き、何があっても絶対に言葉を発してはならないということを言いつけてどこかへ去っていく。一人になった杜子春のところに怪物達がやってくるが、杜子春は言葉を発しない。やがて地獄の鬼がやってきて、杜子春を地獄へ連れて行き、厳しい責めを行った。

一 地獄には誰でも知っている通り、剣の山や血の池の外にも、焦熱地獄という焰の谷や極寒地獄という氷の海が、真暗な空の下に並んでいます。鬼どもはそういう地獄の中へ、代る代る杜子春をほうりこみました。ですから杜子春は無残にも、剣に胸を貫かれるやら、焰に顔を焼かれるやら、舌を抜かれるやら、皮を剥がれるやら、鉄の杵につかれるやら、油の鍋に煮られるやら、毒蛇に脳味噌を吸われるやら、熊鷹に眼を食われるやら、――その苦しみを数え立てていては、到底際限がない位、あらゆる責苦にあわされたのです。それでも杜子春は我慢強くじつと歯を食いしばったまま、一言も口を利きませんでした。

二 これにはさすがの鬼どもも、呆れ返ってしまったのでしよう。もう一度夜のような空を飛んで、森羅殿の前へ帰って来ると、さっきの通り杜子春を階の下に引き据えながら、御殿の上の閻魔大王に、「この罪人はどうしても、ものを言う様子がございません。」と、口を揃えて言上しました。

三 閻魔大王はまゆをひそめて、しばらく思案に暮れていましたが、やがて何か思いついたと見えて、「この男の父母は、畜生道に落ちているはずだから、早速ここへ引き立てて来い。」と、一匹の鬼に言いつけました。

四 鬼はたちまち風に乗って、地獄の空へ舞ひ上りました。と思うと、また星が流れるように、二匹の獣を駆り立てながら、さっと森羅殿の前へ下りて来ました。その獣を見た杜子春は、驚いたの驚かな

いではありません。なぜかといえはそれは二匹とも、形は見すばらしいやせ馬でしたが、顔は夢にも忘れない、死んだ父母の通りでしたから。

「こら、その方は何のために、峨眉山の上に坐っていたか、まっすぐに白状しなければ、今度はその方の父母に痛い思いをさせてやるぞ。」

〔五〕杜子春はこうおどされても、やはり返答をせずにいました。

「この不孝者めが。その方は父母が苦しんでも、その方さえ都合がよければ、よいと思っているのだな。」

〔六〕閻魔大王は森羅殿も崩れる程、凄じい声でさげびました。

「打て。鬼ども。その二匹の畜生を、肉も骨も打ち砕いてしまえ。」

〔七〕鬼どもは一斉に「はっ」と答えながら、鉄のむちをとって立ち上ると、四方八方から二匹の馬を、容赦なく打ちのめしました。むちはりゅうりゅうと風を切つて、所かまわず雨のように、馬の皮肉を打ち破るのです。馬は、――畜生になった父母は、苦しうに身をもだえて、眼には血の涙を浮べたまま、見てもいられない程いななき立てました。



「どうだ。まだその方は白状しないか。」

〔八〕閻魔大王は鬼どもに、しばらくむちの手をやめさせて、もう一度杜子春の答をうながしました。もうその時には二匹の馬も、肉は裂け骨は砕けて、息も絶え絶えに、倒れ伏していたので。

〔九〕杜子春は必死になって、鉄冠子の言葉を思い出しながら、かたく眼をつぶっていました。するとその時彼の耳には、ほとんど声とはいえないくらい、かすかな声が伝わって来ました。

「心配をおしでない。私たちはどうなっても、お前さえ幸せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何とおっしゃっても、言いたくないことは黙っておいで。」

〔十〕それは確かに懐しい、母親の声に違いありません。杜子春は思わず、眼をあきました。そうして馬の一匹が、力なく地上に倒れたまま、悲しそうに彼の顔へ、じつと眼をやっているのを見ました。母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思いやつて、鬼どものむちに打たれたことを、怨む気色さえも見せないのです。大金持になれば御世辞を言い、貧乏人になれば口も利かない世間の人たちに比べると、何という有難い気持ちでしょう。何という健気な決心でしょう。杜子春は老人の戒めも忘れて、転がるようにその側へ走りよると、両手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落しながら、「お母さん。」と一声を叫びました。……

(芥川龍之介「杜子春」より)

二年
国語
Gアップシート
読む1

組	番・氏名
---	------

★物語と自分の経験を重ね合わせ、感想をまとめよう

問一 蔵本さんは 転がるようにその側へ走りよると の部分には杜子春の気持ちが表現されていると感じ、自分の経験の中に似たことがあったことを思い出しました。次のア～オの中で、この部分と同じ気持ちを表現しているものを一つ選びなさい。

【心情や情景を表す語句について経験を生かして理解する】

- ア 二歳の弟が道路に出ようとしていたので、転がるように走り寄って止めた。
- イ ドッチボールでボールをぶつけられそうだったので、転がるように走ってよけた。
- ウ 妹と遊んでいると晚ご飯の時間になったので、転がるようにテーブルに走り寄った。
- エ 運動会のリレーであと少しで追い抜けそうだったので、転がるように走り寄った。
- オ 朝起きるとお腹が痛かったので、テーブルまで転がるように走り寄った。

問二 蔵本さんは、この文章の中に他の部分とは違って細かい描写を省略して述べている部分があると考えました。その部分を□から一つ選びなさい。また、なぜそのような書き方をしていいのかの意見について、最も適切にまとめられているものをア～オから一つ選びなさい。

【物語の構成や展開について考えをまとめる】

- ア 話の中心でない部分を簡潔に描写することで、話の大事な部分を目立たせるため。
- イ 細かい描写と省略を繰り返すことで、話にメリハリをつけて読み手を飽きさせないため。
- ウ 話をできるだけ短くすることで、読み手が読むときにかかる時間的な負担を減らすため。
- エ 細かい描写をしないことによって、読み手にその場面について深く考えてもらうため。
- オ 登場人物の細かい設定を説明することによって、話の内容に説得力を持たせるため。

部分	意見



問五 蔵本さんはこの文章の描写の特徴について考えたことをまとめました。最も適切なものを次のア～オから一つ選びなさい。

【表現について考えをまとめる】

- ア 杜子春の目線で描きながら、他の人物については杜子春の内面の言葉で描くことで、読み手を杜子春と一体化させている。
- イ 杜子春に寄り添った目線で描きながらも、杜子春の内面は直接描かず、行動の描写で内面まで読み手に想像させている。
- ウ 杜子春を見る閻魔王の目線で描くことで、杜子春の姿を客観的に表現し、読み手に杜子春の内面を想像させている。
- エ 杜子春に寄り添った目線で描きながら、他の人物については気持ち全部をセリフで表現し、内面を読み手に伝えている。
- オ 仙人の視点を通して杜子春を客観的に見ることで、杜子春の性格や考え方を中立的に表現し、物語を簡潔に語っている。

◇読み取ったことをもとに、交流のための感想を書くことにしました。

問六 蔵本さんは、この物語から読み取ったことに重なる自分の経験を思い起こしました。次のア～オのうち、この物語に重なるものとして最も適切なもの一つ選びなさい。

【自分の知識や経験と関連付けて感想をまとめる】

- ア 幼稚園の頃、父と一緒に風呂に入って、優しく髪を洗ってもらったこと。
- イ 日曜日の早朝、父が釣りに出かける時に一緒に連れて行ってもらったこと。
- ウ 運動会の時、友達のお母さんと一緒に母が学校に応援に来てくれたこと。
- エ 私が怪我をしたとき、母が仕事を休んで病院に一緒に行ってくれたこと。
- オ 兄と激しい兄妹げんかをしたときに、父にひどくしかられたこと。



【読む1 物語と自分の経験を重ね合わせ、感想をまとめよう】

問一 ア 問二 部分 □ 意見 ア

問三 ①見すばらしいやせ馬 ②肉は裂け骨は砕けて、息も絶え絶えに、倒れ伏していた

選択肢 エ

問四 部分 ㊦ 意見 エ 問五 イ 問六 エ

解説

問一 文学的な文章では心情を直接表現している部分の他に、情景や行動の描写によって心情を間接的に表現することがあります。「走る」という行動でも、「どのように」走るのかという部分に心情が表されることが多いので注意しましょう。この部分では「誰かを守るために急いで走る」という意味が含まれています。このように、理解する際には自分の今までの経験と結びつけてみると、その場面や心情をより深く理解することができます。

問二 文学的な文章では大事なところを浮かび上がらせるために、省略できる部分は省略して描くことがあります。作品のテーマに関わる大事な部分は細かく描写することが多いので、読むときには意識しましょう。□の部分はおおまかな説明の部分になっています。

問三 文学的な文章では段階的な表現でストーリーや心情を間接的に表現することがあります。登場人物達についての描写がどう変化していくかに注目することで、物語の理解がより深くなります。

問四 ストーリーの中で大きな動きがある時は、その直前に注目しましょう。直前に描かれているものが理由やきっかけである場合が多いです。それまで無言だった杜子春が声を出してしまう部分が大きな変化です。

問五 物語では、地の文の視点がどこにあるのかに注目すると、作者の意図をつかむきっかけになります。最初は「登場人物の視点で描かれているのか、第三者の視点で描かれているのか」をとらえ、第三者の視点であったときには、「誰に寄り添った視線なのか」を考えましょう。

問六 物語のテーマを自分の知識や経験に結びつけてとらえると、作者の表現意図に近づくことができます。特に実生活の中の出来事に重ねることができれば、作者が何を言いたかったのかをより具体的にイメージすることができ、この問題では「子どものために親が犠牲になる」という部分で重なるのがエです。